

第105回日本精神神経学会総会

シンポジウム

Disaster and Mental Health : From Asian Perspective

座長 新福 尚隆, 鈴木 友理子

近年, 災害時の精神保健活動への関心が高まっている。初期の心理的反応の多くは, 「異常な事態に対する正常な反応」とみなすことができるが, しかし喪失体験, ト라우マ体験, また既存の精神疾患や, 通常では閾値下であったものが災害のストレスが加わることで事例化したケースなど, 丁寧に対応していく必要がある。また災害は, 精神健康の問題に偏見が付されずに対応できる機会をもたらす。本シンポジウムでは, 様々な災害における精神健康問題の現れ方, サービスの展開, 社会文化的影響に関してそれぞれの演者が論じ, 非常に興味深いセッションであった。

Arshad Hussai 氏は, インド・カシミール地方の紛争における地域住民の自殺問題について紹介した。災害精神保健に関する先行研究では, ソーシャルサポートが精神健康の保護的要因であることは一貫して報告されている。突然襲ってくる自然災害などでは, 被災者らが力を合わせ, 再建に取り組んでいくことが多い。しかし, カシミール地方で持続する紛争下では, このような地域の人びとのつながりが寸断され, 信頼感の回復が最大の課題である現状が紹介された。また, イスラム教の影響で従来自殺率は低かったところが, 近年では自殺率が高まっているという報告であった。

長期間の紛争が人びとの価値観に影響を及ぼして, 社会問題が地域, 人びとの精神的問題として現われているという考察であった。

次に, Azadeh Malekian 氏から, イランのバン (Bam) 地震後の精神保健対応について, 特にサービス提供体制について論じられた。災害に対するトラウマ反応も多かったが, 災害前から麻薬への依存が地域固有の問題として存在しており, 大規模災害で多くの人びとが喪失を経験したり, 新たな生活への適応が求められたりする状況で, 薬物依存の問題が更に顕在化した。そこで, 精神科医などの数少ない専門職を有効に活用できるように, 地域の支援者らを対象に基本的な心理社会的支援に関する研修を行い, 支援の裾野を広げていった。近年の災害後の対応として住民にとって身近な人 (家族や地域のワーカー) の心理社会的ケアに関するスキルを高めて, 必要に応じて専門家に紹介する体制づくりがすすめられているが, そのモデルとなる取り組みであった。その地域の特有の文化を考慮した支援が展開された様子が紹介された。

タイの Nuttorn Pityaratstian 氏からは, 2004年のインドネシア沖地震・津波について報告があった。彼は, 児童精神科医の立場から, 子どもの

シンポジウム Disaster and Mental Health: From Asian Perspective 座長: Naotaka Shinfuku (School of Human Sciences, Seinan Gakuin University), Yuriko Suzuki (Department of Adult Mental Health, National Institute of Mental Health, NCNP) コーディネーター: Yuriko Suzuki (Department of Adult Mental Health, National Institute of Mental Health, NCNP), Tsuyoshi Akiyama (Kanto Medical Center, NTT EC)

トラウマに焦点をあてた認知行動療法，そしてその普及に関する系統的な取り組みの経験を紹介した。タイでは，津波1年後の精神健康に関する疫学調査が発表されているが，その後も4年後の予後調査が実施されたとのことであり，今後の研究発表も待たれるところである。

インドネシアのIsa Multazam Noor氏からは，2006年のJogjakarta地震後の精神疾患の外来統計に関する報告があった。身体症状が多かったこと，また“Nrimo”という（日本語で言えば「しょうがない」に相当するのだろうか）現実を受け入れる心性があるために，精神疾患の出現が少ないのではないか，という文化的考察であった。平常時でもアジアでは欧米に比べて精神疾患の有病率は一般に低い，災害を機に多文化精神医学的考察が深まることも興味深かった。

最後に，藤井千太氏から，1995年の阪神淡路大震災，また兵庫県で発生した水害の経験をもとにした，日本の地域精神保健システム，また長期的な予後に関する発表があった。災害から10年以上経過しても，阪神淡路大震災を経験した人びとはサブクリニカルレベルではあるものの心理的影響をいまだに感じており，特に支援を自ら求めない人へのアウトリーチとスクリーニングの重要性が指摘された。

以上のように，アジア諸国は様々な大型の自然災害，人為災害に遭遇したが，これらの経験から学び，教訓を発信していくことで，世界の精神医学に大いに貢献することが可能である。災害は不幸なことであるが，今後の災害時，そしてさらに平時の精神保健活動の展開が期待されるセッションであった。